

「総合的な学習の時間」における学習課題設定プログラムの開発

～身近な自然に対する発見を土台として～

0515 鈴木俊一郎

指導教官 市川智史助教授

1 はじめに

平成 14 年度より、小学校において「総合的な学習の時間」が本格的に実施されることとなったが、この「総合的な学習の時間」において、環境に関するテーマが取り上げられることは多い。「気づきから行動へ」といわれるように、環境教育において身近な環境に対する気づきや発見から出発することは重要であると考えられる。本研究では、小学校の「総合的な学習の時間」における環境学習の、より良い学習課題設定方法の具体化に向けて、身近な自然を対象として子どもの「発見」を集め、その「発見」に基づいた「学習課題」設定のプログラムを開発・提案する。

2 先行実践事例調査

筆者が着目したのは、子どもの発見を集める一つの手法として、発見したものや気づいたことをカードに書き込んでいくという手法である。これは教科、学年に関係なく幅広く使われており、実際に発見カードを用いて学習課題設定を行った実践例もいくつかある。また一般的な学習課題設定の手法として、ウェビングや KJ 法といったものがあり、学校現場においても使われることがある。

3 プログラムの考案

対象 : 小学校高学年 (5・6 年生)

ねらい : 集団の身近な自然に対する学習課題を導き出す。

内容 : ①身近な自然の中で豊かな体験活動をとおして見つけたものを俳句にする。

②「みつけたよ」から「なぜだろう」「なんだろう」へ変換する。

③グループで疑問を整理 (3 つの掲示板「わからない」「調べてみよう」「わかった」)

④「調べてみよう」に集まった疑問をまとめる。

4 プログラムの模擬実践、小学生の発見の事例

考案したプログラムを大学生を対象として模擬実践を行った。改善点としては、発見を共有する場の設定、十分な自然体験の時間の確保、「俳句を書く」ことより「見つける」ことに重点を置く、疑問に対する「予想」を取り入れる、グループでの討議の活性化を促進することなどが挙げられる。また、小学 5 年生を対象に身近な自然の中で「みつけたよ」俳句を書いてもらった。児童の俳句は傾向として、見つけたもの・気付いたことを率直に飾らず表現するということと言える。

5 プログラムの提案

模擬実践、小学生の発見の事例を踏まえて、学習課題設定自体を一つの単元として構想した。

時数	内容
4 時間	第一次 ○豊かな自然体験活動を通してその中で発見したものや気づいたことを「みつけたよ」から始まる俳句にする。
2 時間	第二次 ○書いた俳句を疑問文に転換する ○疑問文に対する答え、または予想を考える
4 時間	第三次 ○「わからない」「調べてみよう」「わかった」という三つの掲示板を使って疑問を整理する。